

## 序：災害復興の再考

### 多義的なケアの視点から

|                |          |       |
|----------------|----------|-------|
| 東京大学大学院総合文化研究科 | 特別研究員 PD | 土田亮   |
| 神戸大学都市安全研究センター | 准教授      | 大津山堅介 |
| 大阪大学大学院人間科学研究科 | 特任研究員    | 高森順子  |
| 静岡大学地域創造教育センター | 講師       | 辻本侑生  |
| 静岡大学人文社会科学部    | 講師       | 望月美希  |



### 1. ケアと復興を見直す

#### (1) 意図とずれ

本特集の目的は、人文社会科学などの分野で近年急速に展開しているケアを災害復興の文脈に組み込むことである。たとえるならば、本特集は、ケアを経糸に、復興を緯糸に通して編み上げる、ひとつのパッチワークをつくろうとする試みである。本特集に寄稿した複数分野の研究者たちは、各々のフィールドや実践、記述を通じて、復興のただなかに立ち現れる、ありふれていながらも多義的なケアや問題・関心に出会い、その輪郭を気づきとともに描き出し、寄り添っている。

ケアと聞いてまず私たちが連想するのは、他者を思いやるありふれた行為や心の機微であろう。実際、英語の“care”は、名詞としては苦悩や嘆き、配慮や保護、興味や愛着まで幅広い意味をもつし、動詞としてみても、世話をする、面倒を見るという具体的な行為としての“care of”と、気にかかる、大切に思うという心の動きを示す“care about”がある。

ここで、最近出版された『ケアを学ぶ人のために』の「はじめに」の示唆的な文章を通して、まずはケアの共通理解を深めたい。

「毎朝、近くに住んでいる数人と集まるとき、私(筆者註：本の編者の一人である西村ユミさん)の妹は同級生(だったと思う)の男の子を誘いに行っていた。その子はいま話すことができず、いつも落ち着かない様子だった。妹が声をかけながら、時には手をつないで歩くことで一緒に登校できていた。それは、特別なことではなく、私たちに

とつての日課だった。ときどきその男の子のお母さんが出てきて、誘ってくれてありがとう、と言っていたのを記憶している。

何年生のときだっただろうか、その男の子は養護学校に行くことになった。一九七九年の養護学校の義務化のタイミングだったかもしれない。その後、一緒に登校することもなくなった。が、あるとき、妹に養護学校の友達ができ、家族ぐるみの付き合いに発展した。この友達がきっかけを作ってくれたのだと思うが、詳しくは思い出せない。母だったか妹だったかが養護学校に行ったとき、一緒に登校をしていた男の子に再会したのだ。そして、そのことを私に教えてくれたとき、『お世話』という言葉が使われていたように記憶している。

この出来事は、私に強い印象を残した。妹がいつも迎えに行き一緒に登校すること、ここには当初、お世話という意味はなかった。他方で、迎えに行ったり手をつないだりしていないと、集合場所に集まることや安全に登校することが難しかったのも事実だ。だから、妹だけでなく一緒に登校する皆が、どこかでその男の子を気にかけていた。あたりまえにしていたそのことは、『お世話』という言葉によって、私にその意味を自覚させたのかもしれない。また、妹があたりまえに行っていたことに、後付けで意味を与えることの押し付けがましさを覚えたからでもあろう。いずれにせよそれは、男の子を妹の同級生としてではなくお世

話の対象にしてしまうことに、気づかされる出来事だったのだ。

この、あたりまえの関心や行為からお世話までの幅が、ケアにはある。登校時に集まる場所や養護学校という場や制度、状況によっても、その行為に与えられる意味が変わる。行為のみではない。組織や環境、法や規範も、ケアの意味や価値に関わる。」(はじめに、pp. 3-4)

私たちは直観的にその出来事をケアとして理解する。そこからはケアが私たちの日頃想定している以上に、意図や実践をめぐる豊かな機微やちょっとした気遣いを通した小さな喜びに満ちていることも見えてくる。けれども、行為する側へ目を向ければ、上っ面なものも素朴なものも含めて、押し付けやお節介など、ケアのイメージや実践からはどこか遠く、ちぐはぐな言葉もある。それらの日本語に込められる行為と、その内奥にある心模様とのあいだまで考えるならば、ケアにおける行為や意味づけは単に「これをしたからケアである」とは把握しきれないものとなる。

こうした思考と実践を何度も行き来しながら、その意味や価値が絶えず問い直されるケアは、私たちの身近なところに遍在している。だからこそ、先の西村の文章から透かし見える意図とずれに、私たちはより注意深くなる必要があるだろう。西村<sup>2)</sup>はこの問題に対して、「ケアする者の主体性に立脚した議論は、往々にして行為者が適切な意図を持ってさえいれば、そこにケアの関係が成立しているのだという主張に結びつきがちである。だがその意図が適切であるとなぜ言えるのか、その行為がどういった価値や体制に奉仕するのかは、必ずしも明白ではない」(p.4)と指摘する。

こうしてまごつきながらもケアについて考えることは、私たちが自明視しているケアの意図や実践、イメージのずれを浮き彫りにする。たとえば、看護師で臨床哲学者の西川<sup>3)</sup>は、夕方になると認知症の高齢者が「おうちに帰りたい」と思い、落ち着きがなくなる「たそがれ症候群」によって困惑し、不穏そうな表情を浮かべる高齢女性との施設での出来事<sup>補註(1)</sup>を綴

りながら、パッチングケアとパッシングケアという二つのケアを比較する。

詳細は同書に譲るとして、端的に整理すれば、前者は環境と当人のあいだに配置された小さな断片を繕い (patching)、問題の解決を目指していくケアの方法である。他方で後者は、患者のことをとくに放置し、その場を取り繕いながら、問題をやり過ごす (passing) ケアのやり方である。一見すると、前者はあるべきケアであり、後者は否定されるべきものだと考えられるかもしれない。ただ西川の議論が示唆的なのは、前者こそが理解や解決に拘泥し、出来事を特別な意味へと回収しようとするのが他者を横領 (appropriation)<sup>4)</sup>する危うさをはらんでいるとした上で、その危うさから離れるためにも、私たちはときに問題のやり過ぎに身を任せることも必要である、と述べる点にある。それは私たちが想定するケアのイメージからずれながらもその葛藤に説得性を与えている。このケアをめぐる示唆は、する／される／してしまう／しなければならない／目の当たりにする／無視する／ただかわらに／やり過ごすといった力の配置を伴う立場性を反照し、場や関係性、行為そのものを問い直していくことにもつながる。

## (2) 災害復興とケアのイメージ

それこそ災害復興とケアの関係性について考えるならば、両者はきわめて親和的なものとして理解されてきたし、復興過程にみられる多様な実践は、広くケア実践として捉えることができるだろう。たとえば、令和6年能登半島地震での地域拠点におけるボランティア活動をもとに、ケアの担い手について自らも帯同しながら考えた頼政の論文<sup>5)</sup>では、現地スタッフで長期支援に携わったNさんの事例を通して、次のようにケアの場面や関係性を示している。

「4月からは仮設住宅に通う機会も増えていった。Nさんは『見守りするイメージはなく、おばあちゃんの家に行くイメージ』で、『仮設には目的なく行っていた』という。実際に、筆者(筆者註：頼政氏のこと)も一緒に活動していたのだが、Nさ

んは仮設に遊びに行くとして出て行ったきり、2~3 時間経っても帰ってこないということもあった。後から何をしてたのか聞いてみると、T さんの仮設住宅に訪問して昼寝をしていたというのである。筆者がたまに見かける T さんの反応を見ていると、そう言った関係が心地よい様子が見られた。避難所で活動している際は、常に複数の住民が避難していて周りに人がいる中での関係であったが、仮設住宅に引っ越してからは 1 対 1 での関係も増えていき、関係もより変化していった。筆者も拠点で仮設住宅の住民との食事会を開催した際に N ちゃんは特別や、と T さんがつぶやかれていたのを聞いた。支援者と被災者という関係を越えた関係になっているということであろう。」(pp. 35-36)

このように、匿名的な他者としての「ボランティアさん」「被災者」ではなく、顔や人柄、身振りを互いに知るなかで構築される、紛れもない「N さん」「T さん」という関係性への変化を通して、ケアの行いや考え方は変わっていく。復興におけるボランティア実践から導き出されるこの指摘は重要であり、支援活動に携わった経験をもつ者であれば、実感を伴ってあるべき現場のケアについて理解できる。

だが、そうした疑いようもない真正なケアへの理解や領域ばかりに目が向けられることで、逆に見落とされてきた側面もあるだろう。たとえば、似通って見えるケアらしさを装った振る舞いや規範に対して、「それはケアではない」と指摘する契機や勇気を失わせたこと。あるいは、一見真っ当そうなケアのイメージから逸脱するものに対して、そこにある声ある声、声なき声、場面、振る舞いなどのケアのきざしを不可視化してきたこと。私たちはそうした経験をしてこなかっただろうか。あるいは、そのような場面に出くわしたことはなかっただろうか。

優しさや信念、善意、同情・同調、心配として差し出したケアらしさが、実はケアに見せかけたそぶりであったり、行為や対象を道具化するものであったり、過剰な自己犠牲や執着・横着であったりする。また、

他者や場所を暴力的に支配することや、ニーズを無視してやり過ごすことを含む状況もある。その結果、自らや相手、関係性、道徳心を、ひそやかに、あるいはおおぴらに、冷ややかに傷つけ、苦しめることがある。そうした偽りのケアの受け手側にはきっと、一人では抱えきれない怒りや悲しみ、傷が残る。

他方、冷たくそっけない仕草のなかに、その人らしい天邪鬼さを感じ取り、裏腹な距離感に優しさを見出そうとする<sup>補註(2)</sup>。また、慣れない現場や他者に対して、なるべく傷つけまいとしながら、おずおずと、ぎこちなく領域に踏み込み、身体に触れ、心に触れようとすることもある。そこに他者の反応があって、ようやくほっと肩の荷が下りることもあれば、ヒヤッしたり、驚いて手や言葉を引っ込めてしまったりすることもある。こうした日常的なやり取りや何気なさから考えるだけでも、そこに沈潜している齟齬や矛盾、動揺をも見つめることで、愛や優しさに満ちた、自明で真つ当なものとされてきたケア像は静かに揺らぎ始める。

こうした揺らぎを災害復興の文脈へと引き寄せるならば、復興や災間<sup>6)</sup>の日常に埋もれている、既存の枠組みには当てはめがたい経験やこぼれ落ちそうな出来事、目を背けたくなるような場面をも、ケアの射程に収めることができるのではないか。本特集は、災害復興研究にケアの視点を導入することで、既存の理解からはこぼれ落ちてきた経験や関係性に目を向け、そのずれや多義性を含めてケア概念の射程を再考する場となることを目指している。

### (3) ケアをめぐる多義性

ところで、なぜここまでして別様のケアの諸相を明らかにしたいのか。その経緯を特集代表者である土田が端的に述べるならば、以下のように要約できる。あえて個人的な経験を含めて述べるのが許されるならば、かつて関わった災害ボランティアの経験が、当時の私にとって心を砕く出来事として感じられたからである(本特集・土田論考参照)。ただ、その経験は別の人からしてみれば、被災地におけるよりもっともらしいケアがもたらす気づきへと目が移ろうなか

で、意識されないまま過ぎ去るものだったかもしれない。あるいは、繰り返し生起する出来事として、すでに慣れ親しんだものとなっている可能性もあった。

復興研究や実践において、支援者が傷ついた経験に目を向けるよりも、被災者のためにより重要で緊急性の高い課題があるとして、それがトリアージ的な発想のもとで周縁化され、あるいは自ら蓋をしてしまうことはきっと少なくない。だが、その捉えどころのない経験を整序したり、明晰に分析したりすることを私にはどうしても引き受けることができなかった。災害に関わる研究者として抱いていた、あるべき矜持や規範はそこで揺らぎ、結果として私は燃え尽きてしまった。

もちろん、単に私自身の脆弱さや感受性の問題として、その出来事を再帰的に理解することもできるだろう。しかし、その後ゆっくりと自身のケアと回復の過程を経て、改めて当時の出来事や語りに光を当てたとき、そこには復興の過程に横たわる倫理やケアの問題が存在していたことに気づいた。そして、それらに向き合うなかで、当時どのような関係性が存在し、あるいは生成しつつあったのかも見えてきたのである<sup>7)</sup>。

ここで思い起こされるのは、近年のケア論が示してきた、ケアを単なる優しさや支援の技法としてではなく、自らの倫理観と照らし合わせて、葛藤や依存、傷つきや失敗をも含む関係的な実践として捉える視点である。近年 Stevenson<sup>8)</sup>や中村<sup>9)</sup>が描いたように、ケアは必ずしもよい結果や救済へ結びつくものではなく、応答しきれなさや割り切れなさのなかに現れることがある。そう考えるならば、当時の私が経験した燃え尽きやままならなさもまた、ケアの外部に位置する例外的な出来事ではなく、ケアをめぐる多義的な経験の一部として考えることができるのかもしれない。

とはいえ、いうまでもなく、ここで述べたような私の経験にもとづくケアのみが、本特集の照準となるわけではない。ここで呼びかけたいのは、私たちがケアに対して一般的に抱くような愛情や親密さにまつわる連想、あるいは既成のイメージを実践や規範から相対化することである<sup>8)</sup>。冒頭の西村の文章が示唆する

ように、ケアをめぐる多義性を出発点とし、切実な対象との距離の取り方そのもの、各分野の視座や依拠する理論の差異を通じて現実を問い、試行錯誤しながら考え、実践を通して答えることが重要である。

この縫い合わせを復興研究に取り入れることによって、これまで不可視化されてきた実践や経験を浮かび上がらせるとともに、災害復興の現実在即した理解を可能にする。すなわち、本特集においてケアの多義性を明示することは、単一の定義に還元されることで取りこぼされてきた実践や関係性を可視化し、今日の災害復興をめぐる認識と実践へのアプローチそのものを拡張するうえで不可欠であると、特集の執筆者一同は考える。

## 2. ケアの射程

### (1) 復興に内在するケアの問い

私たちにとってケアという言葉が記憶に新しいものとして立ち現れるのは、パンデミックや戦禍をとにくぐり抜けるこの世界のなかで、あるいはそれとともに、医療・看護・衛生・福祉をはじめ、育児や介護、障がい、身体・精神、家庭、ジェンダー、生きづらさ、トラウマ、環境、労働、依存、包摂・排除などをめぐる多様なケアのあり方と、それに光を当ててきたフェミニズム思想の高まりの双方に触れてきたためであろう<sup>10-20)</sup>ほか。

こうした研究群を参照しながら基本的な理解を整理すれば、ケアとは、日常においては一見取るに足らない行いのように見えながらも、特定の状況において細やかな配慮やニーズを要する対象に向けてなされる行為だといえる。ケアの諸行為は、社会や秩序、関係性を維持し、ケアのもつ互酬的な循環を再生産する。ケアを通して他者を思いやり、他者の存在を契機として自己を見つめ返すことは、自他のあいだに創造的な関係性を生み出す契機ともなる。

より平易に言えば、ケアは、傷つきやすさや弱さを抱えた他者に出会ったときに、「気にかけてあげなければならぬ」という感覚やスイッチが立ち上がるような、

あるいは手を差し伸べなければならないような、倫理や責任、義務を伴う気遣いや関与ともいえようか。こうしたケアに満ちた実践は、本論考の第1節(2)で紹介した頼政の事例のように、災害の発生から復興に至るまでのさまざまな局面においても見出されうる。私たちはそう想定することができる。

だが、それだけだろうか。「こんなケアがあつてよいのか」と問いを喚起するようなケアとの出会いを、私たちはどれほど経験してきただろうか。それはいかなる場面や条件のもとで立ち現れるのか。また、他者との関わりをめぐる、日常と災害復興の場面とを往還しながら、より根源的な問いが立ち上がる。それは、災害がもたらす苦しみ他者と共有したり、経験したりすることが容易にはできないなかで、いかにして相互に関わり合うのか、という問いだ。ケアは、しばしば自己犠牲や純粋な贈与として現れる。しかし、そのような行為を担いながらも、なおのこと私たちは、カタストロフィのただなかや新たな日常へと向かう復興の時間のなかで、いかに自らの生を肯定しうるのか。

これらの問いに向き合うことは、災害復興におけるケアの実践と規範的な思考の限界を可視化し、復興過程における倫理と関係性の再編を捉えることにつながるだろう。言い換えれば、それは災害復興におけるケアの関係論的な視座を開く試みでもある。

## (2) 関係と倫理のケアに光を当てる

ここで改めて、ケアに関する主要な論者がどのようにそれを定義してきたのかを確認しておきたい。今日のケア論には複数の流れや議論の展開があり、その全体を網羅することは本稿の範囲を超える。そのため、ここでは本特集に通底する、空間・存在・活動・生存・自己などを織り込んだ視点として、トロント、モル、テーレンのケア論を軸にしつつ、そこから示唆を受けた議論を紹介する。

トロント<sup>21)</sup>は、ケアを「すべてがそのなかで可能な限りよく生きられるように『世界』を維持し、継続し、修復するために行われる、人類のあらゆる活動」と定義する。この「世界」には、私たちが生命を維持

するために複雑に織り込もうとするあらゆる存在が含まれるとされる。また、ケアの実践は、気遣い・責任・能力・応答という4つの倫理的要素に結びつくとして論じている。

モル<sup>22,23)</sup>は、ケアを、制御不可能な状況のもとでも調整を重ねながら、よりよい状態を目指す実践のプロセスとして理解する。そこでは、よいケアが実行されるために、気配りと具体性が善であり、放置が悪であるという構造に気づくことが重要になる。この考えのもとづけば、ケアの実践は、ケアの受け手／与え手という二者関係にとどまらず、多様なアクターの絡まり合いのなかで生じる相互作用として捉えられる。モルはこのような理解を通して、「ケアのロジック」や「手直し(doctoring)」<sup>23)</sup>といった概念を提示している(本特集・辻本論考を参照)。

また、トロントやモルの議論とも響き合うプイグ・デ・ベラカーサ<sup>24,25)</sup>は、「誰」あるいは生物などの非人間も含めた存在の「何」がケアの対象とされるのか、またケアが「誰」によって担われているのかという点に注意を払う必要性を指摘する。そこでは、技術・自然・人間のあいだに相互作用が生じ続ける状況のなかで、ケアは、具体的で日常的な関係性に埋め込まれた倫理を生成し、維持する実践として理解される。

テーレン<sup>26)</sup>は、ケアに関する語りや実践の具体的事例を出発点として議論することを重視し、既存の関係性からではなく、実際に遂行されている実践からケアを捉える立場をとる。ケア実践やそこにおける関係性の生成・再編・分断といった変化、オープンエンドなプロセス、公的なものと私的なものとのせめぎ合いに注目することによって、ケアの概念化はしばしば予期せぬ帰結を明らかにするのだとテーレンはいう。

森<sup>27)</sup>は、テーレンの議論を意識しつつ、ケアの実践が、人やモノ、制度や経験といった多様な要素の関係性のなかで行われる相互行為の過程として、協働的に構築される様相に着目する。森はケアを、与える者と与えられる者という非対称な関係性に基づきつつ、社会との境界を動的に組み替え、試行錯誤を伴う反復

的な時間性のもとで展開するものとして捉える。

このように近年のケア論には、ケアを普遍的な倫理や原則から説明するのではなく、実践的で関係的なものとして捉え直していく動向がみられる。実践あるいは理念に根ざしたケアは、他者やモノの存在を契機として自己を根源から見つめ返し、自他のあいだに生起する行為を通じて創造的な共同性を立ち上げる。それはまた、断片化し、個に閉じ込められがちな世界を、別様のかたちで縫い直し、編み直していく創造的な実践でもある。

### (3) 社会の揺らぎから見える復興とケアの課題

こうした整理を踏まえた上で改めて災害復興に立ち返って考えれば次の問いが浮かび上がる。すなわち、災害、あるいは社会の揺らぎが常態化し、ケアの営みやそれに関わる制度が形骸化あるいは再編されつつあるなかで、私たちは新たなケアらしさをいかに構築しうるのであるのか。

三井<sup>28)</sup>の整理を借りれば、ケアという概念は1970年代に一部で用いられ始め、1990年代以降に広く一般化したものであり、キュア（治療）や単なる身の回りの世話とは異なり、個々人の思いに寄り添い、それを包み込むような配慮の営みを指すものとして、支援や社会との関係のなかで理解されてきた。三井の指摘にみられるように、ケアの理念と実践は、基本的には介護、障がい、福祉、医療、ジェンダー、養老・養育といった領域における配慮として論じられてきた。だが今日では、そうした領域に収まらない形で展開されつつある（本特集・高森および望月論考参照）。

ケアの諸行為は、社会や秩序、関係性を維持し、再生産する側面を有している。こうしたケアの営みを支える制度や実践は、ある社会の歴史的な文脈、価値観、環境、市場との関係のなかで形成されてきたものといえる。しかし近年では、福祉国家・福祉社会、諸制度、血縁や家族主義のもとで編み込まれてきたケアの体制や共同性が希薄化し、その基盤が揺らぎつつある。個人化が進むことやポスト関係論的社会のなかで、従来とは異なる形のつながりや支え合いの関係性<sup>補注(3)</sup>

をどのように構想しうるのが問われている<sup>29-33)</sup>。

ただ災害研究において、ケアは専門的な支援に基づく「支援する／される」という関係性の内部にとどまってきた場面が少なくない。日常と災害のあいだに位置するケアの場面や次元、ニーズの充足、語りといった具体的な状況からの考察は限られていた<sup>補注(4)</sup>。三井<sup>28)</sup>の視点を借りるなら、私たちはこのようなあり方で十分に論じられてこなかった領域に対して「社会」を見出し、そこにケアの視線を向けることによって、ケアのあり方だけでなく、自らの立ち位置をも捉え返す契機を得ることができる。

一方で、災害復興に関する計画や法制度の実態に対しては、より切実に、ケアをもって考える必要が生じている。近年、個別避難計画や地区防災計画、さらに災害関連法や災害ケースマネジメント、災害対応ガバナンス、保険といった、避難、防災、復興支援・被災者支援の制度は整備されつつある<sup>34-36)</sup>ほか。

他方で、人的・経済的資源の減少や災害の頻発が見込まれる災間社会においては、福祉や医療の機能不全が顕在化する可能性も指摘されており、制度としてのケア、すなわち、公共的な福祉や社会保障に近接するものの脆弱性はより身近な問題となりつつある<sup>37,38)</sup>。

他にも利他や贈与、ボランティア、宗教実践といった非定型・無形の実践や理念に基づく制度外のケアは、有効性<sup>39-43)</sup>ほかをもちながらも、先に述べた公共的な領域や制度としてのケアを全面的に代替するものではない。その継続性や自発性を維持することには困難も伴うし、被災しながらも支援をするといった被災地の職員における二重の疎外のようなジレンマ<sup>44)</sup>なども考慮する必要があるだろう。

さらに、災害ボランティアが典型的に示すように、制度外のケアを制度化しようとする、しばしばシステムティックあるいはパターンリスティックな実践へと傾斜し、本来志向されていたケアの理念とのあいだに齟齬や揺らぎが生じる。このような状況においては、制度としてのケアを評価するだけでなく、制度外のケアの多様性や萌芽をいかに捉えるかが重要な課

題となる<sup>45)</sup>。こうした問題群は、孤立した、あるいは選択・アクセス可能な自律的主体を前提としてきたこと、そしてケアが社会に深く埋め込まれていることとのあいだに生じる乖離によって、担い手の不足や不在、個人の傷つきやすさ、さらには社会そのものの揺らぎとともに可視化されてきたものでもある。

### 3. ケアを広げる

#### (1) 復興のオルタナティブとケアの萌芽を見出す

災害復興研究において、オルタナティブを担いうる実践やこれまでケアとして十分に捉えられてこなかった領域に光を当てることで、ケアの萌芽はどのように見出されるのだろうか。そして、それは何を考えていることになるのだろうか。

避難の場面に即して考えるならば、松田<sup>46)</sup>が指摘するように、「現在の避難施策は根本的に自律する個人を想定しており、その判断や行動能力が欠如する人を『要支援者』として措置の対象とする点、さらに要支援者が避難するためのケアは専門職や家族が行うように限定して配分されている点にケアの軽視が見られる」(p. 322)。この指摘は、「自らの命を自らが守る」という近代的個人・自律観や行政任せの防災のあり方を問い直すものである。そこから「自らの命を自ら『のみで』守る」ことができる人などいないという前提に立ち、ケアに満ちた避難施策のオルタナティブを構想する可能性が開かれる。

また、物資支援と贈与との関係について、内尾<sup>47)</sup>は、東日本大震災の被災地において全国から莫大な義援金と支援物資、そして無償のサービス、すなわち贈与が集積したことを事例に考察している。こうした支援、とりわけ遠隔からの匿名の支援には返礼のしようがない。だから、支援の受け手である被災者には申し訳なさといった精神的な負債やしこりが残る。加えて、善意の支援は非対称な関係をもたらし、「痛みなき抑圧」となって被災者の尊厳を傷つける。ここには、本来なされるべきケアであるはずの行為が、どこかひりつくような痛みを伴い、受け手の心を不意に傷つけて

しまう可能性が示されている。

頼政<sup>48)</sup>は、専門職による支援にとどまらず、むしろ専門職であるとは言いがたいボランティア、地域住民、被災者同士による支援があふれ、多様な活動を生み出す〈場〉に着目する。それは専門職による支援の「前」と「後」を支える、日常に埋め込まれたベースの支援に根ざしている。被災者は災害に遭遇してから突然支援を必要とするため、支援者との持続的な関わりを前提にした支援は一見困難にみえる。しかし、頼政の議論は、目の前の人への日常的で小さな応答を通して困難を越え、互いに関わり合うなかで立ち上がるケアの可能性を示している。

木村<sup>49)</sup>は、より長い時間スケールと日常のなかからケアの周辺を描こうとする。家族や親密圏という基本的なケアの担い手・空間から、公共セクター、市場、地域へとその担い手が広がり、ケアの領域が変容していくただなかで、ケアの担い手も受け手も、ともに限界や緊張関係を抱えながら暮らしを続けていく。その過程では、家から仮設住宅、公営住宅、プレハブ、老人福祉施設へと暮らしの場所が静かに移りゆく。さらにそこには、漁業と家族、そして繰り返し襲う津波と暮らしが織り込まれている。木村の議論は、手探りの日常のなかで、ケアのニーズがつねに探し続けられている雑多でままたまならない様相を示している。同時に、被災から復興へ、そして新たな日常を歩むうえで切り離せない、人に紐づけられたケアの時間性と空間性を示すものでもある(本特集・大津山論考参照)。

このような部分的な響き合いを踏まえれば、既存のケア論に依拠しつつ、他領域で展開されてきた理論や具体的な実践のリアリティ、そこで生じる困難さも参照することができるだろう。それらを災害研究と接続することによって、ケアの別様の可能性や見方、つながりを切り開くことが求められているのではないか。

#### (2) 本特集の方向性と各論考の紹介

本特集では、これらの議論を踏まえつつ、ケアを介護・世話・配慮・気づかいといった直接的な訳語とか「ケアする／される」という二項対立的な理解からひ

とまず距離を置いて考えてみる。これは木村の言葉を借りるならば、「ケアのなかに取り込んでいく動きにいったん『待った』をかけること」という見方にふさわしい<sup>49)</sup>。

ただし、ケアは多義的であると主張しつつ、それが何であるかをまったく示さなければ、特集全体が散漫に見えてしまうかもしれない。本特集でのケアをひとつの定義へ集約するのではなく、あえて多様でバラバラなまま通底するものとして提示するならば、それは「個人の生と社会の不安定さを前提とし、人と人、さらには人とモノ・環境・社会との関係性のなかで生起する、応答的かつ持続的な実践と倫理」としていうことができるだろう。このように考えれば、ケアは相互の立場や状況の変容を伴いながらよりよい方向と場を模索し、なんとか調整を重ねていく過程や関係性として捉えることができる。

災害研究の文脈において、こうしたケアはカタルフィや終わりの見えない復興のただなかで、人びとが社会や関係性の綻び、個人の脆さや葛藤に向き合う場面に立ち現れる。そこでは災害復興で巡り合う他者や出来事だけでなく、そこに投企する自他の生や日常、存在のあり方を意味づけ、相互に確かめ合っていく関係性を含めて、ケアの関係論的な倫理を理解することが必要だろう。以上の議論を踏まえ、本特集に収められた各論考を紹介する。

大津山は、場所や空間に積層する暮らしの履歴と、それを生きる人びとに紐づけられた空間と時間を、「多スケールのケア」へと拡張する試みを考察する。米国における戦略的撤退と、日本の令和6年能登半島地震・奥能登豪雨の事例を比較しながら、土地が有する時間スケールの差異について指摘する。この指摘は、これまでケアの議論において十分に扱われてこなかった、対象としての土地との長期的な愛着や切断といった関係性の再考を迫るものといえよう。私たちが日常的に行いうるケアの基盤となる家や土地、そしてその引き継ぎや解体も含めた履歴に着目することで、ケアとは人と人とのあいだだけでなく、人が長い時間を

かけて根づいてきた空間関係の基盤のなかにも立ち現れることに気づかされる。

高森は、自身が事務局長として活動してきた「阪神大震災を記録しつづける会」での手記執筆を、認知行動療法の枠組みを参照しながら理論化し、「存在確認のケア」として読み替えることで、災害復興における文化的・社会的機能としてのケアを論じる。手記を書くこと、そしてそれを読むことは、出来事の言語化による存在確認、行動変容の足場、さらには他者の認知や行動の変化を俯瞰する契機として機能する。高森はそれを、専門家による治療的介入とは異なる、ゆるやかな個人のセルフケアを涵養する力のひとつとして位置づける。こうした、いつ、誰に向けて、何を書き、何を読むのが開かれた営みと投企的なプロセスを長期的に実践することによって、災害復興における手詰まり感を内側から解きほぐしていく。

辻本は、タイミングや規模が予測しがたい多重・複合災害に加え、緩慢な日常のなかにある個人的な困難や生きづらさも含めた多重的な危機のなかで、人びとがなんとか生き延びながら行う調整を、「危機とケア」の関係性として見出す。それは、リスクのなかに住まうことを自立や合理性の問題として過度に捉える視点を相対化し、モルの言葉を借りれば、「選択のロジック」に回収されないケアのあり方を提示するものである。辻本は、自然とともにある合理性のもとで人びとが判断し暮らしているという見方を避け、不確実な自然や社会の条件、環境のもとで状況を調整しながら判断し、危機とともに生きられた「ケアのロジック」を考察する。

土田は、自ら災害ボランティアとして現場に入り、ままたらなさに陥ってしまった経験から、「ケアするように復興を描く」ことについて考察する。その記述を通して、何の苦しみや難しさにとらわれていたのかを素描する。その際、事実が曖昧になったり、書き手が躊躇したりする瞬間の経験を尊重することを主眼にした民族誌 *Life Beside Itself* と対話することで、復興の出来事と自らの脆さを書くことを、ケアの態度や

倫理の一形態として提示する。

望月は、被災によって喪失された出来事に対し、長期的な関与を通して支援するなかで見出される「活動の中にあるケア」を論じる。そこで望月が着目するのは、個別訪問や医療・福祉といった制度的・専門的な支援ではなく、農作業や手仕事を通して日常性を少しずつ取り戻していく、一見素朴で取るに足らないようにも見える営みである。そうした活動を継続するなかで、ケアの受け手／担い手という区分は曖昧になり、活動の形態もまたごちゃ混ぜになっていく。そこには、問題の解決や立ち直りを目指すキュアの視点では捉えきれない、生に寄り添い、ともに悩み続けるケアの姿が見出される。

本特集の議論を通じて、従来の災害復興研究において顕在化してこなかった、あるいは分析対象とされてこなかった諸実践や理念を、多義的なケアの視点から捉え直し、あらためて災害復興の文脈に位置づけたい。ひいては、被災地にとどまらず、未災地における備えや理解にも資する、ケアの再構築につなげたい。

本特集を通して、その意義の一端が読者に伝わることを願っている。一見すると、「あれもこれもケア」と指し示しているようで、際限なく取り止めのない形になっているように見えるかもしれない。しかし、それはまだ私たちが見出していないケアの輪郭や価値に触れ、あるいはそれに近づこうとしている契機でもある。こうして、私たちの何気ない日常や復興のなかにある出来事を「これもケアかもしれない」と発見し、ケアについて考え、語り合い、実践を通して綻びを繕い直し、また別のパッチワークをつくる仲間が増えるならば、それは執筆者一同にとって望外の喜びである。

#### 謝辞

本特集は、日本災害復興学会 2024 年度研究会「災害復興とケアの研究会」（代表：土田亮、メンバー：大津山堅介・高森順子・辻本侑生・望月美希〔五十音順〕）による成果である。また、日本災害復興学会 2025 年度阪神大会にて行われた分科会「分科会 6 災害復興の再考：多義的なケアの視点から」およびそこでのオープンディスカッションをもとに取りまとめたものである。この過程では、多くの方々との対話や協力、懸命なサポートなどを通じて、議論を深めることができた。お一人おひとりのお名前を挙げることは難しいが、ここに記

して、関わってくださったすべての方々に心より深く御礼申し上げます。

#### 補注

- (1) この出来事の解説は、中村の議論<sup>50)</sup>に依拠している。なお、土田の母方の祖父もたそがれ症候群によって介護に抵抗したり、ときに攻撃的になったりしたことがあり、この記述に心当たりがある。長年連れ添っていた祖母や、介護に関わっていた母や叔母らがその振る舞いにひどく困惑していたこと、また、その変わりように私自身や兄姉も愕然としたことを覚えている。
- (2) この場面は、L. Stevenson の著書 *Life Beside Itself* 第 6 章“Song”に登場する Paulosie との出来事を参照している。
- (3) 近年ではつながることが奨励され、つながりから切り離すこと（分離・切断 detachment）が悪とみなされる傾向に対して、批判的に関係性を検討する研究<sup>29,30)</sup>（ほか）もある。
- (4) 特集執筆者の一人である土田が、別の研究会で執筆した論考<sup>51,52)</sup>も参照されたい。また、いわゆる専門職によるケアや医療領域からみたケアの範疇を超えて、災害とケアの関係を論じた研究や論文集もいくつか存在する<sup>53-57)</sup>（ほか）。

#### 参考文献

- 1) 西村ユミ・熊谷晋一郎（編）（2026），ケアを学ぶ人のために世界思想社。
- 2) 西真如・有井晴香・森明子（2025），序章：心配と係り合いの人類学，西真如・有井晴香・森明子（編）心配と係り合いの人類学：この世界を縫い直すためのケアの理論と実践，pp. 1-17，ナカニシヤ出版。
- 3) 西川勝（2022），[増補] ためらいの看護，ハザ。
- 4) 驚田清一（2015），＜聴く＞ことの力：臨床哲学試論，ちくま学芸文庫。
- 5) 頼政良太（2025），＜ケア＞の担い手としての災害ボランティア：令和 6 年能登半島地震での地域拠点におけるボランティア活動を事例に，災害と共生，Vol.9, No.1, pp. 23-40。
- 6) 仁平典宏（2012），＜災間＞の思考：繰り返す 3・11 の日付のために，赤坂憲雄・小熊英二（編），「辺境」から始まる東京／東北論，明石書店，pp.122-158。
- 7) 堀江未央・木曾恵子（編）（2026），つながりあう身体：ケアと共振のエスノグラフィー，京都大学学術出版会。
- 8) Stevenson, L. (2014), *Life Beside Itself: Imagining Care in the Canadian Arctic*, University of California Press.
- 9) 中村沙絵（2017），響応する身体：スリランカの老人施設ヴァディヒティ・ニヴァーサの民族誌，ナカニシヤ出版。
- 10) 東畑開人（2019），居るのはつらいよ：ケアとセラピーについての覚書，医学書院。
- 11) トロント，ジョアン・C.（2020），ケアするのは誰か？：新しい民主主義のかたちへ，岡野八代（訳）白澤社。
- 12) 小川公代（2021），ケアの倫理とエンパワメント，講談社。
- 13) スロート，マイケル（2021），ケアの倫理と共感，早川正祐・松田一郎（訳）勁草書房。
- 14) ギリガン，キャロル（2022），もうひとつの声で：心理学の理論とケアの倫理，川本隆史・山辺恵理子・米典子訳，風行社。
- 15) 宮地尚子・村上靖彦（2023），とまる、はずす、きえる：ケアとトラウマと時間について，青土社。

- 16) キテイ, エヴァ・F. (2023), 愛の労働あるいは依存とケアの正義論 [新装版], 岡野八代・牟田和恵 (監訳), 白澤社.
- 17) 岡野八代 (2024), ケアの倫理: フェミニズムの政治思想, 岩波書店.
- 18) 村上靖彦 (2025), 傷つきやすさと傷つけやすさ: ケアと生きるスペースをめぐるある男性研究者が考えたこと, KADOKAWA.
- 19) 久木元美琴 (2025), ケアの地理学に関する覚書: 『Introducing Human Geographies』(第4版)を参照して, 地域と環境, No.19, pp. 1-22.
- 20) 山根純佳・平山亮 (2025), ケアする私の「しんどい」はどこからくるのか: 見えないケア責任を語る言葉を紡ぐために, 勁草書房.
- 21) トロント, ジョアン・C. (2024), モラル・バウンダリー: ケアの倫理と政治学, 杉本竜也 (訳) 勁草書房.
- 22) Mol, A., Moser, I. and Pols, J. (eds.), *Care in Practice: On Tinkering in Clinics, Homes and Farms*, transcript, 2010.
- 23) モル, A. (2020), ケアのロジック: 選択は患者のためになるか, 浜田明範・田口陽子 (訳), 水声社.
- 24) Puig de la Bellacasa, M. (2011), *Matters of Care in Technoscience: Assembling Neglected Things*. *Social Studies of Science*, Vol. 41, No. 1, pp. 85-106.
- 25) Puig de la Bellacasa, M. (2017), *Matters of Care: Speculative Ethics in More than Human Worlds*. University of Minnesota Press.
- 26) Thelen, T. (2015), *Care as Social Organization: Creating, Maintaining and Dissolving Significant Relations*. *Anthropological Theory*, Vol. 15, No.4, pp.497-515.
- 27) 森明子 (編) (2019), ケアが生まれる場: 他者とともに生きる社会のために, ナカニシヤ出版.
- 28) 三井さよ (2021), ケアと支援と「社会」の発見: 個のむこうにあるもの, 生活書院.
- 29) Candea, M. et al. (2015), Introduction: Reconsidering detachment, In Candea, M. et al. (eds.) *Detachment: Essays on the Limits of Relational Thinking*, Manchester University Press, pp. 1-31.
- 30) 相田豊 (2022), 《特集》孤独とつながり: ポスト関係論的音楽論に向けて 序, 文化人類学, Vol. 87, No. 3, pp. 407-420.
- 31) 落合恵美子 (2023), 親密圏と公共圏の社会学: ケアの20世紀体制を超えて, 有斐閣.
- 32) 辻本侑生 (2023), 福祉制度の人類学的研究に向けて: 日本の介護保険制度における「自立」概念の分析から, 文化人類学, Vol. 88, No. 3, pp. 435-451.
- 33) 川口幸大 (2025), 《特集》脱家族主義の人類学に向けて: ポスト関係論は生と死をいかに引き受けるか 序, 文化人類学, Vol. 90, No.1, pp. 54-66.
- 34) 津久井進 (2020), 災害ケースマネジメントガイドブック, 合同出版.
- 35) 岡本正 (2021), 被災したあなたを助けるお金とくらしの話 増補版, 弘文堂.
- 36) 菅野拓 (2021), 災害対応ガバナンス: 被災者支援の混乱を止める, ナカニシヤ出版.
- 37) 阪本真由美 (2025), 地域が主役の自治体災害対策: 参加・協働・連携の減災マネジメント, 学芸出版社.
- 38) 児玉聡・池端祐一朗 (編) (2026), 防災の倫理: 「正しい」災害対策とは何か?, ナカニシヤ出版.
- 39) 頼政良太・宮本匠 (2022), 日本における災害ボランティアセンターのこれまでとこれから: 「公」と「民」の対立を乗り越えた先に, 実験社会心理学研究, Vol. 61, No. 2, pp. 37-56.
- 40) 宮本匠 (2024), 「みんな」って誰?: 災間と過疎をのびのびと生きる, 世界思想社.
- 41) 渥美公秀 (2014), 災害ボランティア: 新しい社会へのグループ・ダイナミクス, 弘文堂.
- 42) 宗教者災害支援連絡会 (編) (2016), 災害支援ハンドブック: 宗教者の実践とその協働, 法蔵館.
- 43) 渥美公秀 (2019), <助かる>社会に向けた災害ボランティア: 遊動化のドライブの活性化, 災害と共生, Vol.3, No.1, pp. 49-55.
- 44) 大門大朗・渥美公秀 (2018), 災害後の被災地における被災者と支援者の関係を考える: 2016 年熊本地震における災害ボランティアセンターの事例から, 災害と共生, Vol.2, No.1, pp.25-32.
- 45) 渥美公秀・石塚裕子 (編) (2021), 誰もが<助かる>社会: まちづくりに織り込む防災・減災, 新曜社.
- 46) 松田曜子 (2025), ケアとしての避難, 自然災害科学, Vol.44, No.3, pp. 315-325.
- 47) 内尾太一 (2018), 復興と尊厳: 震災後を生きる南三陸町の軌跡, 東京大学出版会.
- 48) 頼政良太 (2023), ベースの支援に根差した災害時の多様な活動を生み出す「場」についての研究: 一般社団法人おもやいの活動から, 災害と共生, Vol. 7, No. 1, pp. 1-15.
- 49) 木村周平 (2019), 津波のあとで, 終わりの手前で: 津波被災地域のケアと家, 森明子 (編) ケアが生まれる場: 他者とともに生きる社会のために, ナカニシヤ出版, pp. 130-148.
- 50) 中村沙絵 (2025), 第1章 縫い繕うケア, 西真如・有井晴香・森明子 (編) 心配と係り合いの人類学: この世界を縫い直すためのケアの理論と実践, pp. 21-38, ナカニシヤ出版.
- 51) 土田亮・藤井愛海・頼政良太・中野元太 (2025), 日常と災害におけるケアのアナロジーの探究: ケアの議論と言葉の手がかりをつくる, 京都大学防災研究所年報, No.68, B, pp. 20-32.
- 52) Tsuchida, R., Yorimasa, R., Nisikawa, M., & Nakano, G. (2026), *Pluralistic Caring in Disaster Contexts: Lessons from the Noto Peninsula Complex Disaster and Its Restoration*. *Journal of Disaster Research*, Vol. 21, No. 5, in print.
- 53) 似田貝香門・吉原直樹 (編) (2015), 震災と市民2 支援とケア, 東京大学出版会.
- 54) 板倉由紀 (2018), 災害・支援・ケアの社会学: 地域保健とジェンダーの視点から, 生活書院.
- 55) 高森順子 (編) (2024), 残らなかったものを想起する: 「あの日」の災害アーカイブ論, 堀之内出版.
- 56) 伊藤嘉高 (2024), 移動する地域社会学: 自治・共生・アクターネットワーク理論, 知泉書館.
- 57) 島村優希 (2026), その人らしいケアをもたらす災害支援の実践知: 令和6年能登半島地震の事例より, 大阪大学大学院人間科学研究科修士論文.